モノグラフ

中国漢族の対聯

韓 敏（カン ビン）
本館民族社会研究部

中国の対聯は家、宮殿、寺院、店などの建物の扉や柱に掛けたり貼ったりする対句のことであり、古典の詩歌と韻文から進展変化してきたものである。対句の字数には特に制限はないが、ふたつの句の字数は必ず同じである。そのうえ、押韻、対照・強調の効果を与える修辞法が用いられる。対聯は歴史が長く、漢族文化の顕著な特長のひとつである。

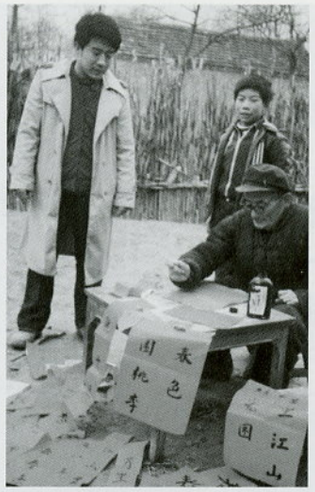
対聯は使用する目的、時間と場所によって春聯、寿聯、喜聯、挽聯などに分類することができる。

春聯は旧暦のお正月に新春の到来を祝うために家の扉の左右に貼るめでたい対句のことである。文献に記録されたもっとも古い春聯は、五代十国時代（九〇七～九七九年）後蜀皇帝孟昶の「新年納余慶（新年に前年の喜びを受け継ぎ）、佳節号長春（このすばらしい祭日を長春とよぶ）」という五言対句であることが通説である。宋代までの春聯は、魔よけになると信じられていた桃の木の板に書かれ、「桃符」とよばれていた。

春聯が桃の板から現在のような縦長の赤い紙にかわったのは宋代である。そして明代までの春聯はおもに皇族や士大夫のあいだで流行っていたが、明代になって、明の太祖である朱元璋が力を入れて普及に努めたことで、春聯は初めて民間で流行りはじめた。

春聯はそもそも手書きのものであり、学のある人が新春を迎える喜びと来る年に対する期待を対句に託すのである。現在、春聯を書ける人の少ない田舎では、大晦日になると、学のある人が村人のために大量の春聯を書いて配る。都市部では手書きの春聯よりも印刷されたものの方が多い。

漢族の人びとは大晦日には、家の玄関、寝室、書斎、各部屋の入り口だけではなく、倉庫、家畜の小屋、大型農具まで春聯を貼る。次の正月まで貼ったままにするのがしきたりである。また、さかさまに「福」を貼るのは、さかさまを意味する「倒」と「到」（来）の発音が同じことから「福」をさかさまに飾ることによって、来る一年幸福が我が家に訪れるように祈願するのである。


毎年大晦日になると、漢族の村の男性は村人のために春聯を書いて配っている（安徽省簫〈しょう〉県）

春聯は新春の喜びを祝うためのものなので、不幸のあった家は、亡くなった家族を偲ぶために三年間春聯を貼らないところもあれば、一年目は白、二年目は緑、あるいは紺色、三年目は黄色、四年目から赤の春聯を貼るところもある。

このほかに長寿を祝う寿聯、新婚や新築と引っ越しを祝う喜聯もある。

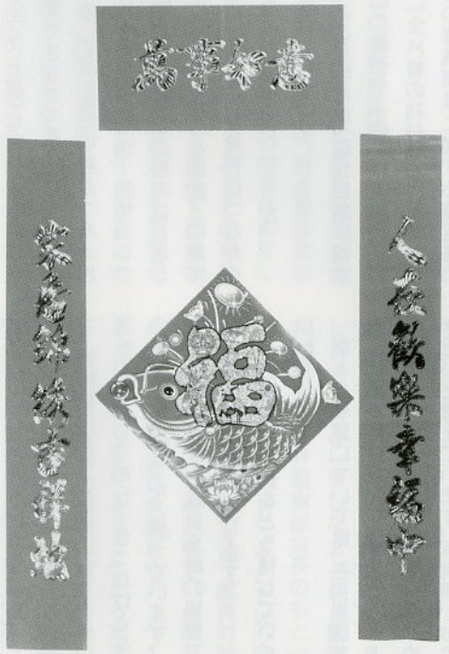
結婚式の喜聯は、結婚式場と新郎新婦の家の玄関と寝室の入り口に貼られ、にぎやかな雰囲気を作っている。家に貼る喜聯は一年間貼りっぱなしである。その内容は新婚の喜びと祝福、結婚する両家の家柄、新郎新婦の才能、人柄と容姿などをたたえるものが多い。結婚式のほかに漢族の人びとは新築の家に引っ越すときや店を開店するときも、吉の日を慎重に選び、新しい家と店の入り口に新築と開店の喜びを祝う喜聯を飾るのである。

右記の春聯、寿聯、喜聯のほかに、挽聯もある。挽聯は弔文、挽歌から変化してきたものであり、故人を偲んだり、故人の人柄などを賛美する対句を白い紙に書いて、通夜や告別式の会場に貼る。雲南保山地域の漢族の人びとは親が亡くなった場合、家の扉に挽聯を貼る。親を失った深い悲しみ、親の恩情、親の苦労したことなどを切に訴えた挽聯は、一年貼り続ける。

こうして、漢族の人びとは、正月を迎える喜びや新年への期待、結婚の喜び、家族を失った悲しみ、家族の秩序と孝行の精神を漢字の対聯に託している。対聯は漢字文化の結晶のひとつであるといえよう。漢族の人びとは対聯を家の内と外に飾ることによって、自分たちの喜怒哀楽をあらわしているとともに、受け継いでいる文化的シンボルと価値観を表象し、伝承し、伝播している。そして、多民族共生の中国では、対聯の漢字文化はチワン族、ミャオ族、満族、ペー族などの少数民族のあいだにも受容され、共有されている。

チワン族の正月飾り（対聯）（H215629、215630）

↑自宅で結婚式を挙げる漢族農家の玄関と入り口は新婚を祝う喜聯がたくさん飾ってある
←死者の出た漢族農家の入り口は故人を失った家族の悲しみをあらわす挽聯が貼ってある
（雲南省騰衝〈とうしょう〉県）


西安で収集された印刷の春聯

安徽省で収集された手書きの春聯